

# 福祉国家形成期における社会理論の一断面 —ビアトリス・ウェブの「応用社会学」とスペンサー—

江里口 拓

## 1 問題の所在

福祉国家の経済思想は、しばしば社会主義と混同されてきた。福祉＝貧困対策という過度に単純化された通念のもとで、労働者階級のイデオロギーたる社会主義との区別があいまいだったからである。本稿の対象であるシドニー&ビアトリス・ウェブ（Sidney James Webb, 1st Baron Passfield, 1859-1947; Beatrice Potter Webb, 1857-1943, 以下、それぞれ「シドニー」、「ビアトリス」、夫妻を一括する時は「ウェブ」と表記する）は、福祉国家思想の重要人物であると同時に、自己の構想を社会主義という言葉で表現したことから、こうした理解の典型となってきた。しかし本稿では、ウェブの主張の普遍性は「社会主義」という政治スローガンよりも、むしろ「応用社会学」、「社会制御」という彼らの社会理論に反映されていたことを明らかにしたい。そのことは同時に、ウェブの想定する福祉国家が単なる弱者への硬直的な資源配分システムではなく、経済・社会システムの変化に対して「社会制度」の絶えざる調整を可能にする動的な制度デザインであったことを意味する。

これまでウェブの社会理論は、社会主義の亜種と誤解されることで、その実像は明らかにされてこなかった。その一つの典型が、19世紀の自由主義哲学者ハーバート・スペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）とウェブとの対比のされ方に現れている。というのも、これまでスペンサーとウェブについては、個人主義的功利主義vs社会主義という構図のもとで、政治思想面の対立が強調されてきたからである。

しかし、ビアトリスの生まれたポッター家とスペンサーが深い親交を結んでおり、ビアトリスはスペンサーから家庭教師のような教育を受けてきたという重要な事実の持つ意味は、ほぼ無視されてきた。例えば、マーガレット・コー

ルは次のように述べていた。

「明らかに、ビアトリス・ウェブが若い頃に意識していた知的影響としては、スペンサーが最も強かった。成人後の思索は、結婚以前においてすら、独特なスペンサー的体系化の影響の痕跡をほとんどとどめておらず、このことは彼女の精神の独自性と力強さをより一層証拠立てている。ほとんど唯一存続したと思われる共通の要素といえ、事実を確認し、それと社会理論や人間や動物の行為理論との関係を発見する情熱ぐらいなものである。」(Cole 1946, 17 / 訳22-23)

スペンサーからビアトリスへの影響は無視できるというのが、コールの主張である。確かにビアトリス自身も、その自伝『私の徒弟時代』（1926年）において、富裕階級出身の自分が「ついに社会主義者になった」という劇的要素を演出するにあたって、古い自由主義の代表としてのスペンサーからの脱却を強調することあった。

ただし、こうした物語を鵜呑みにしてはならない。我々は社会学者ウェブと、民衆に語りかける政治家ウェブとの2つの顔を慎重に区別しなければならない。政治家ウェブが前面に出てくるとき、当時の歴史文脈のもとで問題は意図的に単純化される。とりわけ1920年代に執筆されたビアトリスの自伝は、労働党を軸とした労働者階級の政治動員という政治戦略をもとに、旧式の個人主義に対して自己の社会主義を強調する色彩が強い。しかし、その背後にあった社会学者ウェブに目を向ける時、実は、そこにはスペンサーの社会進化論から着実に学びつつ、自己の社会理論を形成していったビアトリスの姿が隠されているのである。以下、本稿では、ビアトリスとスペンサーとの知的な継承関係と、その離脱過程を追跡することで、ウェブの社会理論の特徴を明らかにしたい。

## 2 ポッター家とスペンサー

ビアトリス・(ポッター) ウェブは、上層中産階級の9人姉妹の8番目に生ま

れた。彼女の両親はともに産業革命で勃興した極めて豊かな中産階級の代表であった。父方のポッター家は、世紀初頭に農場経営から身を起こしたユニタリアン（非国教徒）であり、祖父リチャード・ポッター（1778-1842）は、1840年代に「マンチェスター最大の倉庫業者」にのぼりつめた大事業家であった。この祖父こそは「ラディカル・ディック」\*1の異名をとった「マンチェスター派」議員であり、「反穀物法同盟」においてコブデン、ブライトと並んで活躍した自由党急進派の名士であった。

ビアトリスの父リチャード・ポッター（祖父と同名、1817-1892）は「ジェントルマン資本主義」の例外にもれず、実業家から金利生活者への転身を試み、結婚後にイングランド南部に隠棲を試みる。だが証券投資の失敗によって、すぐさま実業界へ舞い戻ることになった。リチャードは実業家として有能で、製材業で損失を取り返した後に、義父ヘイワースからグレート・ウエスタン鉄道の重役を任され、さらにカナダのグランド・トランク鉄道の社長もつとめた。リチャードはやがて非国教徒から国教徒へと改宗し、1867年の第二次選挙法改正をめぐって自由党から保守党に鞍替えをした（B.Webb 1926, 2-10）。

ビアトリスの母ローレンシナ・ヘイワース（1821-1882）の一族も、18世紀末にランカシャーの家内工業の綿職人から身を起こした裕福な中産階級であった。祖父のローレンス・ヘイワースは、リヴァプール商人として南アフリカ貿易で成功をおさめ、非国教徒の自由黨員として1847年にダービー選出の国会議員となる。彼は19世紀半ばの鉄道ブームで活躍し、「リヴァプール・パーティ」の一員として、マンチェスター＝リヴァプール鉄道を起業し、グレート・ウエスタン鉄道の大株主でもあった（B.Webb 1926, 2）\*2。このように、ビアトリスの両親は、ヴィクトリア中期の自由党急進派の本流に属していたのであった。

ビアトリスが生まれたスタンディッシュ邸は、グロースターシャーに位置し、コッツウォルズ丘陵とセバーン川溪谷とに挟まれた緑豊かなカントリー・ハウスであった。病弱のビアトリスは正式な学校教育は受けなかったが、彼女の家には、T.H.ハクスリー、J.ティンダール、J.マルティノー、T.カーライルなどの名士が出入りしていた。その名だたる訪問者の一人がハーバート・スペンサーであったことは、あまりに有名である。

スペンサーがリチャードに出会ったのは『社会静学』（1851年）出版前の1845年であり、鉄道技師として先に親交のあったローレンス・ヘイワースの家においてであった。スペンサーは、ビアトリスの両親について「これまで出会った最も尊敬すべき夫婦」と記していた（B.Webb 1926, 22, Spencer 1904, 297）。スペンサーとリチャードとの親交はやや奇妙なものであったようだ。スペンサーは、リチャードの「現実主義」に自己の社会哲学の理想像を見出したが、リチャードはスペンサーの「総合哲学」に関心を示さなかったようである（B.Webb 1926, 23-24）。ハリソン（Harrison 2000）によれば、「リチャード・ポターとH.スペンサーの友情は、当面の必要または目的の一致よりも、むしろ共通の思い出によるものであった」（Harrison 2000, 105 / 訳110）。すなわち両者の間には、自由党急進派からの出発という政治風土が共通していたのである。

ビアトリスは、名声を博していくハーバート・スペンサーを家庭教師のようにして育ち、彼を「精神的な空気の一部」（B.Webb 1926, 35）として呼吸した。それはヴィクトリア中期における最高の知的環境であった。ビアトリスは専属の家庭教師に学ぶかたわら、スペンサーの来訪を心待ちにしていた\*3。もちろんスペンサーの社会哲学はビアトリスに強い影響を与えることになる。ビアトリスは早期教育の時点ですでに「社会諸制度」を有機体的な視点で観察して法則性を導き出すことを学んだという。ビアトリスは次のように回顧する。

「彼〔スペンサー〕が私に知的影響を与えたのは、彼の業績を体系的に学び始めた20才からであった。それまでは彼の哲学を理解していなかったが、彼との会話や母と彼との楽しく尽きない会話を聞いたりすることによって、物事への好奇心や、根底にある諸原理を発見したい欲望が刺激された。彼は、全ての社会諸制度をあたかも動植物のように見なすことを教えてくれた。それらは観察・分類・説明されうるものであり、人間に十分な知識があればその行動をある程度予想できると。」（B.Webb 1926, 37）

ビアトリスとスペンサーとの間には「友情と深い相互信頼」があり、ビアトリ

スは彼を「親愛なる哲学者」と呼び、スペンサーは彼女を「生まれながらの哲学者」と呼んだ (B.Webb 1926, 28, MacKenzie 1984, 8)。ビアトリスは19才 (1877年) になると、スペンサーの『社会静学』(1851年) や『第一原理』(1862年) に関心を示しはじめた\*4。もっとも、彼の社会哲学を本格的に理解するようになるのは、「母の死後」(1882年4月、ビアトリス24才) に『第一原理』(1862) を精読した後のことであった。

ビアトリスが25才 (1883年) になると、スペンサーは生物学の研究をすすめたが、彼女の関心は「“魂”をもった男女であり、彼らの過去と未来の生活条件であり、彼らの思想や感情や常に変化する行為」にあった (B.Webb 1926, 132-133)。この時、すでにビアトリスは社会問題との関わりを模索していた。彼女は、24才 (1882年) の夏から「慈善組織協会」(Charity Organisation Society : 以下COSと略) の活動に活発に参加するようになっていた。また、1883年 (25才) には、ランカシャーのベイクアップという町で労働者階級の娘に扮した生活を送り、彼らの禁欲と信仰心、労働組合や協同組合の運営を目の当たりにした。ビアトリスは、現実の労働者階級に、いわばミルの言う「自立」への発展の可能性を見出したと言えるだろう。ビアトリスは労働者への偏見について次のように述べていたからである。

「単なる博愛主義者は自立した労働者階級の存在を見落とす傾向にある。彼らが感情的に“大衆”を語るときには、実は“落伍者”を指しているのである。政治家の注意が後者の階層にだけ向けられているのは残念なことである。」(B.Webb 1926, 157)

1886年の夏に、ビアトリスは、スミス、マルクス、マーシャルなどの経済学研究を開始し、自己の方法論の核心となる「経済学と社会学との関係」について思考を深め、スペンサーからの自立を強めていった。1886年10月 (ビアトリス28才) のスペンサーとの文通には、経済学の「サイエンス」と「アート」をめぐるスペンサーの自由主義的混同について、容赦ない批判が記されている (B.Webb 1926, 280-283)。

ビアトリスは同じ頃<sup>\*5</sup>、純粋な市場システムには「進歩」とは逆の「退行」の傾向があるという着想にいたる（B.Webb 1926, 427）。劣悪な労働条件を悪用する「苦汗作業所」の拡大は、労働者の活力低下を促すことで経済全体にマイナスの影響を及ぼすという考え方である。この頃、ビアトリスはチャールズ・ブース（義理の従兄弟）との共同でロンドンのドック労働者の調査に参加し、貧困問題についての認識を深めていた。ビアトリスは「東部ロンドンの失業に関する一婦人の見解」（1887年）を始めとした7本の論文<sup>\*6</sup>を発表し、1887年11月には、次の研究テーマとして協同組合運動を取り上げることを決定した。

ビアトリスが、チャールズ・ブースの紹介でシドニーと出会ったのは、同書の執筆過程の1890年であった。ビアトリスのシドニーへの第一印象は、さほど良好でもなかったようである（B.Webb 1926, 394）。この時にビアトリスは「華麗なる未婚婦人」として社交界では有名であった。彼女はジョセフ・チェンバレンとの結婚を真剣に考えた時期があり、F.Y.エッジワースから求婚されたこともある。ビアトリスの8人の姉妹はそれぞれ各界の大物と結婚していった。七女マーガレットの夫はユニオニスト国会議員ヘンリー・ホブハウスであり、彼は新自由主義者L.T.ホブハウスの従兄弟であった。六女テレーザは後の保守党国会議員C.A.クリップスと結婚し、その息子は後のアトリー労働党内閣の蔵相スタッフォード・クリップスである（Harrison 2000, 86-87 / 訳90-91）。

ビアトリスは「社会主義者」として名の通ったシドニーと結婚するにあたって、その出身階級から強く反対されることになった。スペンサーはビアトリスを遺言執行人に指名していたが、これをきっかけに破棄してしまう<sup>\*7</sup>。なるほどこうした表層だけを見ると、ビアトリスは文字通り「自由主義者」から「社会主義者」へと大きく脱皮し、その意味で冒頭のコールの整理も成り立つように見える。しかし、ビアトリスとスペンサー両者の社会理論をより深い次元で対比させてみると、そこには明確な継承関係を認める事ができ、さらに従来の政治思想的解釈とは異なる社会理論の対立を見いだすことができる。以下、ビアトリスの視点からスペンサーとの関連を詳しく見ていこう。

### 3 経済学と「応用社会学」

ビアトリスとシドニーは1892年に結婚し、以降、両者の「共同作業」が開始されることになる。この時、シドニーはマーシャルの『原理』（1890年）に感銘を受けつつも、それを乗り越える経済学の再編を模索していた。その際、シドニーに具体的な方向を与えたのが、ビアトリスであった。この時、ビアトリスは、スペンサーの社会進化論をもとに、経済学を包摂する「社会学」を構想しており、これをシドニーと追求していくことになったのである。ビアトリスは1886-7年頃（28-29才）、スペンサーを消化して、自立する過程で、経済学について次のような見地に到達していた。

すなわち、リカードウに代表される「経済学（Political Economy）は、富の生産に従事・関係している多くの社会制度のうちほんの一つを扱っているに過ぎない」。たしかに「“ビッグ・ビジネス” すなわち利潤追求資本主義は、現在、最も重要な社会諸制度の一つであるから、それ自体が一つの研究に値する」。だが、経済学はそれだけで完結すべきではないとビアトリスは言う（B.Webb 1926, 423）。

「富の生産・消費にかかわる全活動を、社会進化の諸段階や、この機能を遂行する社会有機体の多様性を無視して一括してしまうこと、およびこれを自己完結した科学を偽装した経済学（political economy）の主題にして、社会における人間行為（human behavior）の研究、いかえれば社会諸制度の研究つまり社会学（Sociology）から切り離すことには、ほとんど利益はなく、不利益ばかりが多いと思われる。」（B.Webb 1926, 422）

経済学は「社会諸制度の研究」、社会学（Sociology）の一部であるべきだという主張である。ビアトリスが構想する「社会学」においては「経済的」という用語は「貨幣を通じた」人間関係に限定されるべきであった（B.Webb 1926, 422-425）。同一の観点からビアトリスは「彼〔マーシャル〕は貨幣で計測している」（MacKenzie 1978a, 163）\*<sup>8</sup>とも批判していた。こうしたビアトリスの着想

は、今日で言う制度経済学，社会経済学と同一の指向性にあったと理解できよう。

ビアトリスは、「応用社会学」(applied sociology) という用語で，自己の構想を表現していた。ビアトリスは，次のように述べていた。

「価格とは単に所与の能力と欲望とがある条件で結び付き，交換価値の創造に同意するにあたっての等式の貨幣ターム表現にすぎない。それはいわば経済生活の結婚による決着である。そして多くの結婚がそうであるように，かならずしも両当事者の利益になるとは限らない。さらに，この涙のベールの向こうで，多くの能力と欲望が結合できずに放置されているのが事実である。はっきり言えば，人類の経済的能力と経済的欲望との結合が絶えず増大していく潮流の中で，絶えざる連続性と相互満足をもたらす最大の手段を提供するのが，応用社会学 (applied sociology) の主要目的の一つである。」(B.Webb 1926, 429)

ビアトリスは近代産業社会の特徴を，人間の「能力」発揮と「欲望」充足という二側面で捉え，両者の結合経路が拡大することを「進歩」とみなした<sup>\*9</sup>。しかし，「価格」すなわち市場システムは，この結合において，それだけでは十分に「効率」的ではない。現実の人間社会は，今日のゲーム理論や制度経済学であれば組織，慣習，協力・非協力，情報の非対称性などの概念で説明するような社会的要素が存在する。これらの社会的要素への着目次第で，社会システムの「効率」がフルに発揮されることもあれば，膨大な「非効率」を生み出すこともある。近代産業社会の「効率」と「進歩」を促すためには，経済システムの外部にある「社会諸制度」への着目が必要となる。

ウェブのこうした視座はK.ポランニーがいう市場システムの社会への「埋め込み」という視点に近い<sup>\*10</sup>。ただしビアトリスの場合には，その「埋め込み」の工夫によって人間の潜在力を向上させていく実践的な「応用科学」として，「応用社会学」と表現されている点に特徴がある。こうしたビアトリスの着想は，シドニーとともに生涯保持された。ウェブは『社会研究の方法』(1932年)

で社会科学方法論を述べた際、「応用科学としての社会学」の研究対象は、「社会的な目的達成の効率性のための計画から生じる社会制度」(Webb 1932, 242 / 訳226) であると説明し、次のように述べている。

「この種に属する社会制度について、唯一の目的は効率であり、また効率こそ最終的な基準である。この社会制度は、あらゆる社会的理想あるいは一般目的のために用いられよう。技術的ないし科学的とも形容される、この社会制度は、応用科学の教えに即して工夫され組織される点に特徴がある。」(Webb 1932, 28 / 訳22)

この「効率」概念こそ、ウェブの構想を貫く価値基準である。今日の経済学では、効率という概念はもっぱらパレート効率性の意味で資源配分における最適化のみを指す。あるいはウェブの時代においては、経済的な次元における経済成長とほぼ同意義で使用されることもある概念であった。しかし、ウェブのいう「効率」とは、人間の「能力」(インプット)と「欲望」充足(アウトプット)との結合の最適経路が満たされた状態のことであった。もちろん、市場を中心とする経済システムが本来の「効率」を発揮しうることもあり、ウェブはこのことを十分に認めていた。ウェブはマーシャル経済学を基本線では認めていたからである。しかし、ウェブの特徴は、市場システムはそれだけで自動的に「効率」を達成しうるものではないと把握した点にある。社会経済システムの「効率」を最大化するためには、市場機構を社会諸制度の働きで補佐するか、あるいは代替的な社会制度を考案しなければならない<sup>\*11</sup>。

こうしたいわば社会経済学的な思考は、スペンサーからの影響を受けたものであったことは疑いない。ウェブの同時代では「応用社会学」という着想を、J.A.スキルトンがすでに唱えており、「社会有機体を改善するという目的でそれに進化論的原理を当てはめること」と定義していた。この定義はウェブのそれにほぼ等しいと見て良からう。ただし、スペンサーはこれに批判的であった(Duncan 1908, 76)。ピアトリスとスペンサーとの差異は、いわゆる「自由主義」対「社会主義」という政治思想ではなく、スペンサーの「社会進化論」に

対するビアトリスの「応用社会学」との対立にあったのである。

冒頭のコールからの引用に関連して触れたように、ビアトリスは、スペンサーからの自己の離脱を強調する傾向にあった。これは当時の社会文脈において、伝統的な自由主義の象徴であるスペンサーと、自己の「社会主義」との区別を強く印象付けるためにとられた、政治家ウェブの戦略であった。しかし当然のことだが、科学者ウェブの意図は、そうした単純な図式とは別次元にあった。従来ウェブの研究は、この点を見落としてきた。実は、この科学者としてのウェブに着目すれば、ビアトリスとスペンサーの間には、方法論において、明らかな継承関係が見られる。次にビアトリスとスペンサーとの継承関係について見てみよう。

#### 4 「機能的適応」と「退行」

ビアトリスは次のように述べていた。

「『第一原理』を読み、生物学・心理学・社会学にわたる一般概念を学んだのは、母の死後であり、それは精神的な活力の始まりであった。この一般概念は私の精神に光をもたらした。というのも例えば、機能的適応（functional adaptation）の重要性は私が後に展開させるコレクティヴィズム的な規制への信念の大きな基礎になっているからだ。ひとたび社会有機体へ科学的方法を適用してみると、イースト・エンドの生活、協同組合、工場法、労働組合の調査において、私はレッセ・フェールという偏見から完全に引き離された。」（B.Webb 1926, 37）

つまりビアトリスは、レッセ・フェールからの離脱にあたって、スペンサーの「社会有機体」概念が決定的影響を与えたことを認めていたのだ。もちろん、ここで言う「社会有機体」概念とは、生物学的類推によって社会をシステムとして分析しようとする態度以上のものではない\*12。その特殊性を明らかにするためには、ビアトリスがスペンサーから継承した「機能的適応」概念に着目すべきである。

ビアトリスは、「競争賛美思想の基礎は自然淘汰」であり、「協同思想の基礎は機能的適応」であると述べ、「機能的適応」と「自然淘汰」とを対置させて把握していた (MacKenzie 1978a, 175)\*<sup>13</sup>。

「“競争万能論”と“協同思想”との根元的差異を理解するには、両者を該当する生物学理論にあてはめるとよい。実業界の経済学者は、競争万能論を主張するとき、生存競争による適者生存という生物法則に盲従している。彼は結局、生存競争が経済的進歩 (economic progress) の唯一の要素だと宣言している。他方、社会主義的改革者は、等しく真理で重要な生物学的事実を分かりやすい言葉で表現する。それは機能変化による構造変化のことであり、機能的適応の法則のことである。例えばオーウェンは、全ての工場労働者が心身の発育を阻害する日常のせいで退行 (degraded) させられつつあると主張した。人間本性の高貴な能力を使用する習慣がなく、栄養不良、過度な緊張、不衛生な環境などによって、この老若男女は、野蛮なる精神と脆弱な肉体をもつ人々へと、人工的に作り替えられてしまった。」 (Potter 1891, 18-19 / 訳26-27, 下線部は原文イタリック)。

ここで想起すべきは、スペンサーと、ダーウィン、ラマルクとの関係であろう。スペンサーはしばしばダーウィンの「適者生存」, 「自然淘汰」の信奉者と思われているが、実際にはラマルク的な「獲得形質の遺伝」の側に立つ (Bowler 1989, 153-154 / 訳231)。「機能的適応」とは、スペンサーが『生物学原理』(1855年)で使用しているラマルク的な概念であった。それは、有機体への外部環境変化による負荷に対して、特定器官・組織の機能が増大・変化することで、有機体と環境とが再び均衡を生み出す作用のことである。

つまり、スペンサーにあって「社会有機体」を構成する個々人は、環境に対して不変の存在ではなく、自己の能力を変化させて「適応」していく可変的な存在として描かれることになる。実はこのことは、スペンサーにおける社会改良的な主張の可能性を示している。つまり、政策的インプリケーションとして

は、不適者は「自然淘汰」されるとするレッセ・フェールを否定し、個々の主体は、より「適者」へと導かれうるという社会改良の可能性を是認することが可能になるからである。しかし、過渡期の思想家スペンサーは、こうした社会改良への可能性を秘めつつも、個人単位での自由競争の確保が政策論的には最善であると見ていた\*14。だが、ピアトリスは、おなじ「機能的適応」という概念から、スペンサーにおける予定調和的な自由主義を否定し、より積極的な社会制御の視点を導入していくことになる。

後にウェッブは、「機能的適応」という概念を、「産業進歩」に対して、労働者が「適応」していく際の理想的メカニズムとして経済学的に再解釈していった。その内容とは、産業社会が要請する「能力・欲望の強度・複雑性の増進に適応すること」である。すなわち、技術革新によって労働過程のあり方が絶えず変更され、労働者には、強度あるいは複雑さの増した仕事が求められるようになる。一方これを支えるためには、消費水準の向上を含めた生活様式の改変が求められる。これらのプロセスが労働者どうしの競争を通じて有効に機能する限り、いわゆる高賃金の経済が累積的に機能していくことになろう。ウェッブは、労働者の側で、こうした「機能的適応」が繰り返されていくことを、「進歩」とみなした（Webb 1897, 703-704 / 訳858）。ブローグも指摘するように、ウェッブは「高賃金の経済論」の立場にある（Blaug 1962, 460-461 / 訳546-547）。

その意味で、ウェッブが言う「機能的適応」は、マーシャルの「生活基準」論と極めて類似した概念として再定義されたことになる\*15。さらに、ウェッブの経済発展論は、経営側での「産業進歩」と、労働側での「機能的適応」との両者によって推進される構造を有し、マーシャルの「有機的成長論」と類似した枠組みを持っていた。ごく大まかに言ってしまえば、ウェッブから見てマーシャル、スペンサーは、自由競争の確保によって予定調和的「進歩」が保障されるという政策論において、同一の側に立っていた。

だが、ウェッブは、マーシャル、スペンサーのいう「進歩」の予定調和性について疑問を投げかけた。ウェッブは、社会進化が、予定調和的に「進歩」をもたらすのではなく、場合によっては「退行」に帰結することがあると考えていたのである。C.ブースとともにイースト・エンドの貧困調査に関与していた

ビアトリスは、マーシャルも含めた「経済学・エコノミクス」を「抽象的経済学」と呼び、次のような疑問を呈していた。

「ドックの門前では、正統派経済学の機械的な原理も無駄である。“労働は最も高く支払われる所へ移動する”という“経済法則”は、人間が金銭的利己心に従うという形而上学的な理論から演繹される命題の一つであるが、ここでは事実によって明確に反証されている。労働は最も低くしか支払われない所へ行き、そこに留まっているのだ。こうした状況の因果関係を発見できるだろうか。臨時労働者を全体として見れば、彼らの経済的能力は断続的で、精神的・肉体的に継続的作業には向いていない。…彼らは、効率の悪さに加えて、経済的欲望が内面的世界の最低水準に落ち込んでいるからである。」(B.Webb 1926, 440-441)

イースト・エンドに集積する下層労働者においては、その生産性と消費欲望がともに低い水準でいわば均衡しているために、こうした状況を改善しようとする内発的誘因は働かない\*<sup>16</sup>。「機能的適応」(「進歩」)とは逆の「退行」が生じているのである。しかも、こうした下層の貧困問題は、市場の作用によっても自然解決されずに残り続けることになる。後にウェブは次のように述べていた。

「人間社会においては、動物界と同じく、寄生によって発達したより低級な形態は、低い能力と弱い欲望とを特徴とするが、自由競争によって必ずしも消滅しない。逆に、その退行形態は、その退行によってますます栄え、高次の形態からますます遠ざかっていくのである」(Webb 1897, 752 / 訳917-918)

ビアトリスは、こうした結論は、マーシャルの経済学からは得られなかったと言う (B.Webb 1926, 426)。

「退行」が市場において放置されてしまうのは、これらの低賃金労働者を雇用

する産業において、いわば低賃金の経済が働くからであった。かつてJ.S.ミルは、「奴隷労働」、「家内工業」などの、労務費が低廉な産業が一国に存在する場合、それらの産業は、比較優位にたち、世界市場へ向けて伸張していくことがある、と述べていた<sup>\*17</sup>。ウェッブも同様に、いわゆる「苦汗産業」が比較優位にたつと主張する。「苦汗産業」の労務費が安価なのは、労働の正常な再生産費が支払われていないか、他者（家族など）から所得を補助されているからである。結果的に、「機能的適応」のファン্ডとして活用されていくべき部分の賃金所得が、そうでない場合よりも減少してしまうことになる。「苦汗産業」は正常な経済社会システムの効率を引き下げながら存続しているという意味で、「寄生的産業」（parasitic industry）とも呼びかえられる。

その存在は、労働者大衆の「機能的適応」を阻害し、国民経済に損失をもたらすだけでなく、「産業進歩」を積極的に達成している基幹産業の成長をも阻害し、「国民的効率」を引き下げる傾向にある。こうした「産業進歩」を担うべき基幹産業が、「苦汗産業」の成長と引き替えに縮小することは、全体として、イギリス経済全体の「退行」に他ならないことになる（Webb 1897, 855 / 訳1049）。ウェッブは、19世紀末イギリスにおける産業衰退への危機感を、「退行」という言葉に凝縮して表現したのであった<sup>\*18</sup>。

マーシャルと異なり、ウェッブにおいて、市場システムは、上方への「進歩」の潜在力を有する一方で、絶えず下方への「退行」の重荷を背負う、それ自体として不完全なシステムとして把握されていた。彼らが言うには、「進化というものは、もし人間の淘汰力によって阻止されなければ、我々が進歩と呼ぶものになるのと同様に、退行に結果することもある」（Webb 1897, 752-753 / 訳918）。ウェッブがいう経済システムは「退行」への「病理」を本来的に抱え込んだものであり、それを包み込む社会・政治制度などによって治療・是正される必要がある<sup>\*19</sup>。ウェッブの生涯にわたる業績が、労働組合、協同組合、地方政府、福祉・労働政策であったのは、こうした課題に自ら答えようとした結果であった。とすれば、そうした社会改良の視点は、彼らにおいて、どのようなロジックで正当化されていくのだろうか。ビアトリスによるスペンサー批判を見ていこう。

## 5 ビアトリスのスペンサー批判

スペンサーにおいて、「社会進化」は、機能の「分化」・「異質化」と「構造の複雑化」をともない「調和的」に進むと想定されていた（Spencer 1892, 8-62 / 訳399-442）。経済の環境変化に対しても人間が個人レベルでこれに「適応」することで社会システムは均衡を保って「進歩」しうるとされていた。いわばラマルクの「適応」のためにこそ、個々人の努力を妨げないようにダーウィンの「自然淘汰」の脅しが必要となる。いわゆるスペンサーにおけるヴィクトリア的な自由主義は、このようなロジックに裏打ちされていたのである。

ビアトリスはスペンサーの社会進化論に賛同しつつも、彼の自由主義を批判して次のように述べていた。

「ハーバート・スペンサーが主張し、全ての資本家が当然視していたのは以下のことである。すなわち、我々が慣れ親しんでいる利潤追求企業は、“事物の自然的秩序”に属していること。他方で、工場法、公衆衛生行政、義務教育、標準賃金率などの国家・自治体さらには労働組合の側の活動は、“人為的な”装置であり、哲学者の言葉で言えば、“偉大なる存在の法則を凌駕するために政治的な構想家によってもくろまれた不器用な機構”であり、それらは“自然に反している”ために、社会的な欠陥となるべく運命付けられていると。例えば、無規制の個人間競争により決定された賃金率は、“賃金の自然率”であり、団結や法律によって決められた賃金率は、“人工的賃金”であり、それゆえに、共同体に有害であると。」（B.Webb 1926, 329）

すなわち、スペンサーは社会改良をめぐる諸問題について、「自由競争」「自由契約」を「正常」かつ「自然」な状態とし、これらの各種の団体の行為は「人為的」であり、社会進化の阻害要因となると考えていたわけである（B.Webb, 1926, 330）。

ビアトリスは、こうしたスペンサーの「自然」と「人為」の二分法を批判して言う。

「しかし、人間を離れて、あるいは彼らの行為から独立した社会構造のようなものは存在しない。厳密に言えば、社会構造・機能の発展は全て、家族から警察、私有財産から公立公園・図書館まで、野蛮なタブーから非常に複雑な議会立法までが、同様に“人為的”なのであり、言い換えれば人間の干渉の一部なのであり、人間行為の帰結なのである。“自然的”，“人為的”というアンチテーゼを社会的行為に適用することが全くナンセンスであることは明らかである。」（B.Webb 1926, 329）

すなわち、「社会進化」を論じる時には、人間の意志による「人為」的調整もそのシステムの一部なのである。人間も自然の一部だから「人為」も「自然」に含めるか、「自然」とは独立のものとして取り出すかは別にして、「人為」的要素をすべて異物として排除することは不適切であるということになるろう\*<sup>20</sup>。

「それゆえ有機体アナロジーは功罪両面である。ハーバート・スペンサーは、社会が自然発生であるから干渉されてはならないと主張する。しかし、政府は（彼がそう表現するように）“自然的に差異化された器官”であり、有機体はその感覚機能を満たすものとして主張することも可能である。このことは国家社会主義を引き出す事も可能ということになる。」（B.Webb1926, 186）

つまり、スペンサーはその社会進化論において「政府」を、機能分化した「器官」として位置付けていた。つまり、それは社会進化から「自然」に生じたものであることになろう。ところが、その政府がなんらかの機能を果たそうとしたとたんに、その機能は「人為的」であるとして、斥けられるというわけだ。ビアトリスは、このようにしてスペンサーの「有機体アナロジー」における首尾一貫性の欠如を鋭く指摘するのである。

もちろん、スペンサーと個人的な関係をもっていたビアトリスであったからスペンサーへの批判的論点について、直接にやりとりを行ったこともある。ビ

アトリスは、不完全なシステムとしての経済社会把握をもとに、自らの「社会病理学」構想をスペンサーにうち明けていた。ビアトリスの「社会病理学」とは次のような内容のものであった。

「全てのタイプの組織(あるいは組織の不在)や、それぞれの社会制度は、それに特有の“社会的な病気”をもっているということを我々は発見するだろう。それは阻止されないならば老化し死滅するだろう—他の補足的な社会制度の存在と発展によって阻止されないならば。」(B.Webb 1926, 424)

スペンサーからの解答は、「社会病理学」に先だって、まず「社会生理学」\*<sup>21</sup>すなわち「産業的行為の正常な諸関係の説明」こそが確立されるべきであり、「本来の政治経済学」がこれに該当する、というものだった。しかも、スペンサーにとって、「これらの病理学的な状態が経済学 (political economy) が立脚する自由競争・自由契約の否定によるものであれば、治療法は、政治経済学の原理を修正することではなく、可能な限り自由競争と自由契約を確立すること」が重要であった (B.Webb 1926, 282-283)。

対する、ビアトリスの批判はこうであった。すなわち、リカードウ\*<sup>22</sup>に代表される経済学は「社会生理学」すなわち社会の「正常」な状態についての科学的知識を、「発見しようとしているのではなく、単に想定している」に過ぎない。リカードウ以降の経済学の「自然」・「正常」という概念は、あくまで想定に過ぎない以上、これを直接的に「統治のアート」と見なす事も誤りである。ビアトリスのいう「社会学」とは、新しい時代の経験に照らし社会科学を実証的基礎に立脚させる試みであった。ビアトリスは、こうして現実の説明能力を回復した経済学を「科学」と呼び、その上で「統治のアート」と区別していた (B.Webb 1926, 284)。

他方、「アート」としての社会改良の位置づけについて、シドニーとビアトリスはT.H.ハクスリーの思想から影響を受けていた。この時、すでにハクスリーは、「政府へのニヒリズム」(1871年)を出版し、自然過程と倫理過程の二分法

によるスペンサー批判の視座を有していた。ビアトリスも、スペンサーを批判するにあたって、ハクスリーの「ハーバート・スペンサーの政府へのニヒリズム」（B.Webb 1926, 329）という用語を使用していたからである。とすれば、ハクスリーを手がかりに打ち立てられていく、彼ら独自の社会改良を是認するロジックはどのようなものであったのだろうか。

## 6 社会を「制御」する

ハクスリーは「自然選択」と「人的選択」との二分法をもとに、「自然」と「アート」との関係を、「自然」と「庭園」のアナロジーを用いてこう説明する。「庭園」が作られる際、土着の植物の一部は取り除かれ、人間の手によって新しい植物が移植される。「庭園」の中では、「自然」における「生存競争」は、「庭師」による「選択」に取って代わられる。しかしその場合、生物が有する「自然」的な「進歩の可能性」は基本的に残されている。人間は、「自然」の内発的な成長力を基本線で活用しつつ、その成果を自己に適した形で活用する「アート」を培ってきた（Huxley 1898, 73 / 訳97-98）。このことは、「庭師」を為政者と読み替えれば社会にも当てはまる。ただし社会において為政者は、全知全能の存在ではないから、「庭師」のように人為的選択を直接に行うべきでなく、「市民の生得的な能力」の開花に向けた「条件」整備に腐心すべきだとハクスリーは述べていた。「人類の前に横たわっているのは、自然の状態に抗して組織された政体というアートの状態を維持し改善するための果てしなき戦いである」と（Huxley 1898, 101-102 / 訳119-120）。スペンサーと同じ進化論的なコンテキストの中から、ハクスリーは「自然」と対置された「アート」すなわち「意識的な調整」の視角を打ち出したのであった\*<sup>23</sup>。

こうしたハクスリーを高く評価するビアトリスと平行して、シドニーにも同様の共鳴板が用意されていた。シドニーは次のように述べていた。

「コント、ダーウィン、スペンサーから、社会有機体という思想が、徐々に人々の精神に浸透し、無意識にあらゆる政治理論と思想を変えつつある。…進化の教訓は、無政府的な個人主義的競争の神格化と最初はみな

されたが、今では全く逆であると思われるようになってきた。ハクスリー教授が語るように、我々は意識的に調整された協同を、相互破壊的な競争の代わりにすることを学んだ。」(S.Webb 1890a, 82-83)

ウェブにおいて、「アート」としての社会改良が目指すべき課題は、それ自体が歴史的に変化しつつあった。「スペンサーには歴史的センスがない」と批判するウェブにあって、解決されるべき課題は、むしろ「社会進化」それ自体によって着実に変化していくものと把握されることになる (B.Webb 1926, 283)。

もちろん、ウェブにあって「社会諸制度」は単なる技術的な制度として把握されていたわけではない。ウェブは社会諸制度の裏には、人間の思考習慣が横たわっていると見ていたからである。ウェブはこれを「社会的な鑄型」(social matrix) と呼んでいた。

「別の比喻でいえば、共同社会に固有の文明や“文化”の形成に貢献しているこれらの影響因すべてが、その社会制度が埋め込まれている (embedded) 鑄型 (matrix) となっているのだ。各世代のあらゆる制度に影響を与えるこの社会的な鑄型も、それら制度から絶え間なく影響されている。この両者は永久に変化する環境を創造・維持するのであり、それに対して個々人は対抗し、反抗しさえするが、その影響からは誰も逃れられない。」(Webb 1932, 4 / 訳3)

ウェブも、制度を結局は人間の思考習慣の産物であると見なしていたことは明らかだろう。その意味で、ウェブを制度経済学一派と呼ぶことが十分に可能であり、その射程は、様々な制度経済学者の中でもT.ヴェブレンに匹敵する包括性を有していた。ウェブは思考習慣（「鑄型」）としての制度が、次の進化への「出発点」になると見なし、「進化を左右する環境のなかで最も強力な要素は社会制度である」(Webb 1920b, 99 / 訳113) と述べ、いわば制度進化の累積的構造を見抜いていたからである (高1996, 29-32, 高2004, 6-7)。

だが、制度進化の「理論」を追求したヴェブレンとは異なり、ウェブの狙

いは、より実践的性格のものであった。ウェッブは自己の構想の一部に、「民主主義」というフィードバック装置を組み込んだ上で、その変化の方向を見定めるにあたって、制度進化の「理論」にとどまらず、制度「改革」を目指していたからである。

「前世代にかなり適合的だった社会制度も、その本質から今日ではさほど適合的でなくなり、明日にはさらに不適合となろう。保守的な精神には苦痛であろうが、現存の社会制度は永遠に適応しつづけざるを得ない。もしも社会制度が、その時代の変化しつづける諸条件に適合すべく意識的かつ継続的に変化しなければ、それらはやがて故障し、ついには暴発的な革命によって暴力的かつ一挙に変化せざるをえなくなってしまう。社会組織の基礎としての民主主義の大きな利点は、すべての社会制度の連続的な適応を許容することであり、社会制度を人々の精神の発展と対応させ続けることである。」（Webb 1920b, 98 / 訳112）

ウェッブによれば、「民主主義」という「制度」進化のためのフィードバック装置が有効に機能しなければ、「革命」という破壊的な変化がもたらされる。この点は、フェビアン主義者ウェッブの神髄であると同時に、彼らの「漸進主義」が、外在的な理想としての社会主義を目指していなかったことを示唆している。

ウェッブにとっての問題は、そうしたフィードバック装置が、真に機能するための実践的方法を模索することにあった。ウェッブによれば、「変化は必然的だが進歩はそうでない。絶えざる変化は、常に環境への適応を意味するが、人が進歩と呼ぶものを決して意味しない」からである（Webb 1920b, 98 / 訳112）。したがって、ウェッブは、19世紀末イギリスに現れた大衆民主主義社会の可能性に期待しつつも、その現状には必ずしも楽観的ではなかった。

「イギリスの人間社会が進歩しつづけるか低水準に後退するか、西欧文明が現在の困難を克服できるかは、根本的には環境を制御する人間の力

量に関わっている。環境に対して人間は適応するか、さもなければ滅びるしかない。人間が思考を深め、その適応が文明の退行ではなく進歩であるように、すなわち活力にあふれ充実した共同社会となるように、環境を制御する能力を身につけ、そう欲しないかぎり、将来世代に確実に訪れるのは進歩ではなく退廃である。」(Webb 1920b, 98-99 / 訳112-113)

ウェブのいう「応用社会学」とは、社会制度を含めた「環境を制御する」ための決定的手段であるということになる。その「制御」がうまく機能しなければ、社会は「進歩」ではなく「退行」へと、たやすく向かってしまう。とすれば、これを食い止めるためには、ウェブのいう「応用社会学」の充実が急務であった。社会「進化」ではなく、社会の「制御」が、彼らの課題となったのである。

#### 注

- \* 1 祖父のリチャードは1832年の第一次選挙法改正をめぐってマンチェスターの自由党利害を代表し、ウィガン選挙区から国会議員に選出された。「ラディカル・ディック」という異名は当時の急進的な政治活動に由来する。なお彼の兄トマス・ポッター(1774-1845)も「都市自治体法」(1835年)で新設されたマンチェスター市の初代市長となる。兄弟は『マンチェスター・ガーディアン』、『マンチェスター・イグザミネー・アンド・タイムズ』を創刊したことで有名である。ビアトリスには祖父以来の「ラディカル派」としての血が流れていたであろう。以上、*Oxford Dictionary of National Biography*, Thomas Bayley Potterの項目および熊谷(1995, 84)を参照。
- \* 2 「リヴァプール・パーティ」としてのローレンス・ハイワースの鉄道業での活躍については湯沢(1988, 64, 86)を参照。
- \* 3 「科学」という名目で、スペンサーの植物・昆虫採集に供をしてカントリー・サイドを走り回ったという、のどかな光景もあったようだ(B.Webb 1926, 26)。
- \* 4 1877年3月19日のビアトリスの日記にはこうある。「私の宗教的意見は、スペンサー氏の『社会静学』が与えるものと同じである。恐れながら言えば、私はいかなる宗教も持っていない。というのも私はまだ科学的宗教を持っていないから。一つだけ確かに思うことがある。いかなる人格も宗教なしには不完全であることだ。」(MacKenzie 1982, 24)

また同年12月15日には、こうある。「スペンサー氏の『第一原理』は、私の感情と思考に非常に大きな影響を与えてきた。それは私を幸福にする。…私はいまだかの偉大なる神秘への依然とした崇拜意識を認めるものである。すなわちそれは、人間性よりも何か大きなものへの美しく高尚な意識を、いかなる科学でさえ超越できないという揺るぎない確信のことである。人は正統派の宗教が消滅してしまうと、いかなる美も神秘も残されないこと

を恐れた。しかし、その代わりに、科学の新しい発見はどれも、偉大なる未知、偉大なる真実に対する我々の正しい評価を増すだろう。」（MacKenzie 1982, 27）

- \* 5 1886年の夏から1887年の春頃と回顧されている（B.Webb 1926, 279-281）。
- \* 6 Potter 1886, Potter 1887, Potter 1888a, Potter 1888b, Potter 1889a, Potter 1889b, Potter 1890のこと。一部はC.ブース『ロンドンにおける民衆の労働と生活』に再録された。
- \* 7 1887年4月頃、ビアトリスはスペンサーに遺言執行人に選ばれ、T.H.ハクスリー夫妻と相談したりしてこれを承諾したようだが、1892年の初頭にスペンサーはこれを辞退した。理由はシドニーとの結婚であった（B.Webb 1926, 27-33）。
- \* 8 1890年8月9日、ビアトリスからシドニーへの手紙
- \* 9 ウェッブは「社会成員は、世代を経て、力を増大・発展させ、複雑化する欲望を満たすことで幅広く十分な生活を獲得する」ことを「進歩」と表現した（Webb 1897, 703-704 / 訳858）
- \* 10 ポランニーの経済思想については、若森（2006）を参照のこと。
- \* 11 ビアトリスは近代社会を、経済関係としてではなく、行為主体である人間と、それを取り巻くいわば社会システムという図式で把握する。経済学が人間（労働）を土地や資本などの生産要素と同列に把握するのは明らかに異なる想定である。ビアトリスにあっては、あくまで行為主体としての人間が中心に置かれ、それが社会システムに対して、様々なサブシステム（社会制度）を経由して適応していく、T.パーソンズ以降展開されていく社会システム論に非常に近い。
- \* 12 ビアトリスは、自らがスペンサーから学んだ論点について、次のように回顧していた。「彼〔スペンサー〕は、全ての社会諸制度をあたかもそれが植物や動物であるかのように見ることを教えてくれた。－それらは観察され、分類され、説明されうるものであり、その行動は、もし人がそれを十分に知っていればある程度予測できるものであると。」（B.Webb 1926, p.37）「機械工学や化学における意味と同じように、何が生じるかを予測し、他者に適切な行動をとらせて、他者を説得するような社会有機体についての科学というものがありうるのか。（B.Webb 1926, viii）
- \* 13 1890年8月17(?)日のビアトリスからシドニーへの手紙
- \* 14 スペンサーによれば「機能的適応」は「自然淘汰」と平行して起こるものであった。「先へ進む前に、機能的適応というプロセスに注目しなくてはならない。それは自然淘汰と同時に作用するものである」（Spencer 1898, 216-217）。高（1991, 12-16）によれば、スペンサーによる「自然淘汰」的な主張の背後には、産業社会においては、人格的秩序ではなく、「自然」という非人格的な秩序こそが、人間主体に自由を感じさせようという判断があった。
- \* 15 マーシャルの「生活基準」論については、岩下（1992）、近藤（1997）を参照。
- \* 16 貧困問題をいわば「進歩」すべき「経済人」への適応の成功・不成功の視点から分析する視点は、C O Sを率いたボザンケにも見られた。江里口（2007）を参照。
- \* 17 J.S.ミル『経済学原理』第3編第25章3を参照。ミルは次のように述べていた。「もし賃金が、輸出品を供給する産業部門のどこかで、人為的あるいは偶然的要因によってその国の一般的賃金率よりも低く保たれるとすると、このことは外国市場においては真に有利な条件となる。それは、他の商品との関係において、これらの商品の比較生産費を引き下げ、あ

たかもその生産に労働がより少ししか必要とされなくなるのと同じ効果を持つのである。」  
(Mill 1865, 689-670 / 訳 (三) 452)

- \*18 ただし、ウェブは19世紀末の時点で絶対的なイギリス産業の衰退を認めていたわけではない。それはあくまで衰退への危機感であった。
- \*19 その意味で、ウェブの「社会進化」論と社会改良の関連付けは、T.パーソンズの「社会システム論」と類似した構造にある。ウェブ夫妻とパーソンズとの関連性は、思想上の盲点であるが、ここではパーソンズがウェブの設立したLSEに在籍していたことがあるという事実だけを指摘しておこう。ちなみに、パーソンズの「社会進化論」は、同じくLSEの社会学教授L.T.ホブハウスとの関連で語られることが多かったことは言うまでもない。
- \*20 ビアトリスによれば、このような自然・人為の二分法は、スペンサーにおける次のような欠点による。「ハーバート・スペンサーは、コントが物質主義と定義した意味で有罪であると思える。彼は、より高次の科学の主題に低次の法則を適用したのである。彼の社会学理論は、社会的事実によって例証された生物学であるのだ。」(B.Webb 1926, 186)あるいは、「それは非有機体的な存在を支配する法則で、有機的生命体の本質を描写する試みるようなものだ。」(B.Webb 1926, 186)
- \*21 「社会生理学」とは、サン＝シモンの用語であった。
- \*22 いわゆる「歴史派」経済学者の間で、「伝統的経済学の欠点の全てをリカードウに押しつけることが一種の流行になっていた」とコリーニが述べるように、ビアトリスもその例外ではなかった (Collini, Winch & Burrow 1983, 253 / 訳217)
- \*23 フリーデン (Feeden 1978) は、ハクスリーの受容のあり方に、ウェブと新自由主義者との差異を見出す。「新自由主義者と同様にウェブは人間自身に社会進化の鍵が保持されていると信じていた。彼が新自由主義者と異なるのはハクスリーの進化論を承認していることであった。その結果、思い通りに操作しようとする彼の信念は、リッチーやホブソンよりも強かった。…ここでもまた”自然的”進化と“人工的”変革との間の緊張関係が明白である。」(Feeden 1978, 91-92)

## 参考文献

- Blaug, M. (1962) 1972. *Economic Theory in Retrospect*, 3rd ed., Cambridge, Cambridge University Press. ブローグ『経済理論の歴史』関恒義、浅野栄一、宮崎犀一訳、東洋経済新報社、昭和43年)
- Bowler, P.J. 1989. *The Invention of Progress: The Victorians and the Past*, Oxford, Basil Blackwell. (ピーター・J・ボウラー『進歩の発明—ヴィクトリア時代の歴史意識—』岡崎修訳、平凡社、1995年)
- Cole, M. 1946(1945). *Beatrice Webb*, Longmans, Green and Co. (マーガレット・コール著『ウェブ夫人の生涯』久保まち子訳、誠文堂新光社、1982年)
- Collini, S., Winch, D. & Burrow, J. 1983. *That Noble Science of Politics; A Study in Nineteenth Century Intellectual History*, Cambridge, Cambridge University Press. (S.コリーニ, D.ウインチ, J.バロウ著『かの高貴なる政治の科学—19世紀知性史研究—』ミネルヴァ書房、2005年)
- Duncan, D. (ed) 1908. *The Life and Letter of Herbert Spencer Volume II*, New York, D. Appleton and Company.

- Freeden, M. 1978. *The New Liberalism : An Ideology of Social Reform*, Oxford, Clarendon Press.
- Harrison, R. 2000. *The Life and the Time of Sidney and Beatrice Webb 1858-1905: the Formative Years*, Macmillan. (ロイドン・ハリソン著『ウエップ夫妻の生涯と時代－1858年～1905年：生誕から共同事業の形成まで－』大前眞訳, ミネルヴァ書房, 2005年)
- Huxley, T.H. 1898. Evolution and Ethics, *Evolution and Ethics, with New Essays on its Victorian and Sociological Context*, Princeton University Press (小川傳司・真理子, 吉岡英二訳『進化と倫理－トマス・ハクスリーの進化思想－』産業図書, 1999年)
- MacKenzie, N.(ed.)1978a. *The Letters of Sidney and Beatrice Webb;Vol.I, Apprenticeships 1873-1892*, Cambridge University Press.
- MacKenzie, N.& J.(eds.)1982. *The Diary of Beatrice Webb: Volume One 1873-1892*, The belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.
- MacKenzie, N.& J.(eds.)1984. *The Diary of Beatrice Webb: Volume Three 1905-1924*, Virago Ppress Limited, published in association with The London School of Economics and Political Science, London.
- Mill, J.S. 1965. *Principles of Political Economy with some of their applications to Social Philosophy*, 1st ed. 1848, University of Tronto Press,Routledge & Kegan Paul (末永茂喜訳『経済学原理』, 岩波書店, 1960年)
- Potter, Beatrice 1886. A Lady's View of the Unemployed at the East, *Pall Mall Gazette - An Evening Newspaper and Review*, No.6530,18,Feb.
- Potter, Beatrice 1887. Dock Life in East End of London, *Nineteenth Century*, Vol.22, No. 123, ed by J Knowles, Kegan Paul Trench & Co., October.
- Potter, Beatrice 1888a. East London Labour, *The Nineteenth Century*, Vol.24, No.138. ed., by J Knowles, Kegan Paul, Trench & Co., August.
- Potter, Beatrice 1888b. The Tailoring Trade of East London, *Nineteenth Century*, Vol. .Sept.
- Potter, Beatrice 1889a. Pages from a Workgirl's Diary, *Nineteenth Century*, Vol.24, No.139, ed. by J Knowles, Kegan Paul, Trench & Co., September.
- Potter, Beatrice 1889b. The Jewish Community of East London. in C.Booth(ed), *Labour and Life of the People in London*, 1st Series,Vol.3
- Potter, Beatrice 1890. The Lords and the Sweating System, *Nineteenth Century*, Vol.27, No.240. ed by J Knowles,Kegan Paul,Trench & Co.,June.
- Potter, Beatrice 1891. *The Co-operative Movement in Great Britain*, Swan Sonnenschein & Co., Rep. 1897, Gower. (ピアトリス・ポッター著『消費組合発達史論』久留間鮫造訳, 大原社会問題研究所, 大正14年)
- Spencer, Herbert 1892. Progress; its law and cause, *Essays; Scientific,Political and Speculative, Vol.1*, D. Appleton and Company (清水訳「進歩について－その法則と原因」『世界の名著；コント, スペンサー』中央公論社, 1980年)
- Spencer, Herbert 1896. *The Principles of Sociology*, Vol.II-3, New York and London,D.Appleton and Company.
- Spencer, Herbert (1866)1898. *The Principles of Biology*, Vol.I, New York and London, D.Appleton and Company.

- Spencer, Herbert 1904. *An Autobiography, Volume I*, D.Appleton and Company, New York.
- Webb, Beatrice 1926. *My Apprenticeship*, Longmans, Green and Co.,Rep.1977,AMS Press Inc.
- Webb, Sidney 1890a. *Socialism in England*, Swan Sonnenschein & Co.
- Webb, Sidney & Beatrice (1897)1920. *Industrial Democracy*, revised with new introduction, Longmans & Green. (シドニー&ベアトリス・ウェブ著『産業民主制論』高野岩三郎監訳, 法政大学出版局, 初版1927年, 第三版1990年)
- Webb, Sidney & Beatrice 1932. *The Methods of Social Study*, Longmans Green. (川喜多喬訳, S.ウェブ, B.ウェブ『社会調査の方法』東京大学出版会, 1982年)
- 江里口拓, 2007. 「バーナード&ヘレン・ボザンケの福祉政策論—“慈善組織協会”の社会学とソーシャル・ワーカー—」『愛知県立大学文学部論集(社会福祉学科編)』55号, 3月, pp.1-27
- 高哲男, 1991. 『ヴェブレン研究』ミネルヴァ書房
- 高哲男, 1996. 「ヴェブレンにおける制度進化の理論」『経済学史学会年報』34号
- 高哲男, 2004. 『現代アメリカ経済思想の起源—プラグマティズムと制度経済学—』名古屋大学出版会
- 若森みどり, 2006. 「K.ポランニー—社会の現実・二重運動・人間の自由—」橋本努編『20世紀の経済学の諸潮流』日本経済評論社
- 湯沢威, 1988. 『イギリス鉄道経営史』日本経済評論社

本研究は、科学研究費による研究成果の一部である。